

「旧校舎の思い出」 ―本館への憶い― 森山 秀子

朝夕、近々壊されるであろう目の前の旧校舎を眺めつつ、何ともいえない物哀しさと、懐かしさを感じる今日このごろの私である。昭和46年、復職した3年後の昭和49年、本館が建設され、全校生徒一丸となって学校の発展を願い勉学に、クラブ活動に邁進したことがまるで昨日のこのように思い出される。復職した私に授業はもちろん、看護科担任、寮監、クラブ顧問（弁論部、新聞部）という重責がまわってきた。中でも弁論部の活動は、生徒たちと心を一つにすることのできるすばらしい場であった。校内弁論大会から始まり、久大地区大会、中央大会、九州大会、全国大会へと進んで行く中で、練習の場となったのが、今まさに壊されようとする本館の視聴覚教室であった。授業が終わるとすぐに視聴覚教室へと走っていく毎日。そこに子供たちがたくさん待っていてくれたからである。夕方遅くまで練習をし、その足で旧体育館へ直行。そんな毎日であったがそれがまたよろこびであり、生きがいでもあった。大会前一週間になると、生徒を私の家に泊め、夜遅くまで体育館で練習をし、次の朝学校へ送ったのである。数々の大会に出場し、栄冠を勝ち取ったその母胎となったのが旧本館、視聴覚教室。まさに感無量である。旧本館よ、本当に有難うございました！

私の人生の中で、大半を占めた昭和学園での教師生活。そしてクラブ活動。旧校舎がなくなるのはさびしいけれど、しかし、75周年という長い歴史が続き、その記念としての新校舎が建設されたことは、また卒業生としてうれしいことである。これからも脈々と受け継がれていく歴史の流れを一隅より拝見していきたい。